

民俗資料館だより

March 31st, 2010

KAMO CITY MUSEUM OF HISTORY NEWS No.17

加茂市民俗資料館

館報 第17号

平成22年3月31日発行

編集・発行

加茂市民俗資料館

新任ごあいさつ

加茂市民俗資料館 館長 齋藤 淳

昨年の11月、中滝孝明前館長のご退任に伴い、20年振りに私は民俗資料館に帰ってきました。

私が文化財保護を担当した1980年代後半は、まさにバブル経済の絶頂期。文化行政においては、盛んに「行政の文化化」(行政全般を人間性・地域性・創造性・美観性などの文化的な視点から捉え直すこと)が叫ばれ、芸術文化振興の気運が高まるとともに、各地でハコものが次々と造られ、「ふるさと創生資金」による町おこし事業の展開に、各自治体がアイディアを競っていました。

ちなみに加茂市では、加茂山観光開発の一環で実施した「野外彫刻展」にも資金の一部が充てられ、当時設置された彫刻群は今も加茂山公園に文化の彩りを加えています。一方では、開発がどんどん進み、変貌を遂げていく加茂市にあって、「開発」を前にした「文化」の肩身の狭さ、文化財保護行政の難しさを感じていた頃でもありました。

旧下条中学校の校舎を転用した当時の民俗資料館は、現在の下条コミュニティセンターの場所にありました。私の母校でもある下条中学校の中庭にあったテニスコートは、千葉県・検見川遺跡出土の二千年前の種子から発芽した「大賀ハス」の池と、加茂が昔漢方薬の集散地であったことに因んで作られた薬草園に、その姿を変えていました。



新しいハス池を掘り終えて(昭和63年5月、現下条コミセン地内)
写真左から故中山隆夫・元公民館長、北村英雄・元民俗資料館長、筆者、服部隆行・現温水プール参事、青柳芳樹・現福祉事務所長



無事に咲いてよかった！(同年8月)
後ろに見える資料館の、事務室から眺める大賀ハスもまた格別でした。

そこへ下条体育センターが建設されることになり、昭和63年5月、「貴重な大賀ハスを枯らしたら大変だ！」とばかり、加茂農林高校の先生にご指導を仰ぎながら、社会教育課職員総出で泥んこになってレンコンを掘り出し、今度は別の場所に新しい池を掘って堆肥を入れて、何とか無事に移植完了。夏には以前にもまして鮮やかなピンクの大輪を咲かせることができ、一同胸をなでおろしました。

苦心して移したその新しい蓮池も、下条コミュニティセンターの建設に伴って平成4年に、一部を残して浄化センターに移され、その後千刈公園にも株分けされて、途絶えることなく現在に至っています。また資料館自体も、これに伴って現在の加茂山公園内・旧図書館の建物に移転しました。

私が在籍した当時、資料館では日々収蔵資料の台



旧下条中学校校舎を転用した民俗資料館当初は、ここに図書館中村配本所と理科センターが併設されていた。(昭和六十二年当時)

その後、下条コミュニティセンターの建設に伴って平成6年、資料館は加茂山の旧図書館の建物に移り、現在に至る。

美術館であれ歴史博物館であれ、いい博物館に身を
をおいた時、人は落ち着きと癒し、あるいは知的興
奮と感動…等々、様々な感情がない交ぜになった、
何とも言えず心地よい、満ち足りた感覚に捉われま
す。館の大小に関わらず、大人も子どもも何度でも
来たくなる、ずっとそこにいたくなる…そんな博物
館が理想だと思います。昭和49年の創立以来、変
遷をたどりながらも皆様に親しんでいただいた加茂
市民俗資料館。もう一度初心に帰って、いい博物
館を目指していけたらと思います。たとえ我が民俗資
料館が、古い、小さな博物館だとしても。

現在の民俗資料館
昭和一六年、現在の北越銀行
加茂支店の地に建てられた
図書館を、昭和四二年、加茂
山に移設。さらに平成六年、
民俗資料館として転用した。

2

2 川向遺跡 — 縄文晩期 —

所在地 加茂市下高柳地内

調査面積 約17m²

調査期間 平成21年7月7日～7月21日

調査原因 学術調査（緊急雇用創出事業）

調査の概要

川向遺跡は加茂川左岸の比較的狭い段丘上に立地する。現況は山林である。川向遺跡は加茂市において最も古くから遺跡として把握されていた地点であったが、遺跡の詳しい内容については不明な点が多いままであった。今回の調査では3ヶ所にトレンチを設けた。全てのトレンチからピット、土坑などの遺構が確認され、縄文土器や石器が多く出土した。縄文土器は粗製土器が主体であるが、文様の特徴から縄文晩期のものである。石器には石鏃や磨製石斧がある。加茂川上流部に営まれた貴重な縄文晩期の集跡である。



図3 川向遺跡 位置図



図4 川向遺跡 確認調査

3 馬越遺跡・太田遺跡・荒又遺跡・新堀遺跡 — 古代・中世 —

所在地 加茂市下条地内

調査期間 平成21年10月5日～11月10日

調査原因 県営ほ場整備事業古津川地区

調査の概要

ほ場整備事業の暗渠工事に伴う掘削工事の際に立

会い、遺構の確認と遺物の採集を行った。これまでの発掘調査の成果と同じく、馬越遺跡、太田遺跡、荒又遺跡からは、古墳～中世の土器が出土した。新堀遺跡からは遺物、遺構ともに確認されていない。

4 下大谷地区 — 化石調査 —

所在地 加茂市下大谷地内

調査期間 平成21年7月6日、9月14日～11月20日

調査原因 学術調査（緊急雇用創出事業）

調査の概要

調査地は大谷川右岸の三柱神社北側にある露頭である。露頭は新潟大学・ト部厚志先生の観察により、新第三紀の地層で、寺泊層の下部に相当するとされた。化石は魚類や植物片が多数出土した。種の特定は困難な資料が大半であるが、魚類の中で、トゲウオの仲間と特定されたものがある。



図5 下大谷地区化石調査 位置図



図6 化石調査の様子



図7 出土した、トゲウオの仲間とみられる魚の化石

加茂の経済人関真次郎と 日本画家土田麦僊、安田靫彦

加茂市文化財調査審議会

副委員長 長谷川 昭一

はじめに

関真次郎氏は、近代産業が成立する明治後期から昭和初期にかけて、絹織物業にとどまらず、広く加茂町産業の近代化の先頭にたって業界をリードした代表的な経済人であった。氏はその一方で、日本美術の良き理解者として、若くして他界した佐渡出身の日本画家土田麦僊（ばくせん）を経済的に支え、また、文化勲章受章者の安田靫彦（ゆきひこ）を良寛の書にひきあわせ、両者の芸術家としての才能を大きく開花させた重要な人物でもあった。このことは、真次郎氏の曾孫関岳夫氏が所蔵しておられた麦僊・靫彦両画伯の真次郎宛の多くの書簡が示してくれる。

ここでは、加藤僖一著の『新潟大学退官記念加藤僖一論文集』所収「土田麦僊の書簡」と『安田靫彦の書簡』及び横山秀樹著の『新潟県立万代島美術館研究紀要』所収「土田麦僊の関真次郎あて葉書」によって、二人の日本画家と関真次郎のかかわりの一端を紹介する。以下は敬称を略す。

1 関真次郎のこと

関真次郎は、上条の商家関金六家の分家「真次郎」家の二代目として文久元年（1861）に生まれた。初代真次郎のころから関東方面との商取引を営んでいたが、明治28年（1895）に福井市から絹織物の羽二重織りの技術を習得して帰郷した弟の真平とともに、近代式大工場の北辰舎を設立して、絹織物業へ進出した。

しかし、明治31年（1898）発行の『越佐商工人名録』には「蒟蒻（こんにゃく）粉卸商関真次郎・正絹製造北辰舎関真平」と記載され、当時はまだ絹織物の製造を弟の真平が担当して、兄の真次郎は関東方面から仕入れた蒟蒻粉の卸売りが主体であったことをうかがわせる。

明治38年の県立羽二重精錬所の加茂への建築にあたっては、真次郎を中心とする誘致合戦が功を奏し、新潟・長岡・三条・栃尾にうち勝った。また、明治41年には、蒸気機関による大規模な製材工場加茂製材株式会社の設立発起人となり、後に取締役

に就任した。この他、加茂銀行の取締役など、このころの加茂経済界で幅広い活躍が目立つ（『加茂市史資料編3』）。

大正8年（1919）には絹織物での片腕であった弟真平が死亡し、北辰舎の経営を含め、一切の責任が真次郎の双肩にかかるようになるとともに、経営は絹織物業に傾斜する。

昭和4年（1929）では、織物生糸業で350円の営業収益税を納め、加茂町第2位であった（『新潟県商工人名録』）。

昭和5年、世界大恐慌が日本にも波及し、10月には生糸価格が明治29年以来の安値にまで大暴落を示すなど、各地で工場の閉鎖や倒産が相次いだ。真次郎の事業も不況に巻き込まれ経営不振となり、昭和9年には竹内栖鳳や土田麦僊の絵など547点の所有美術品を売却しなければならなくなった（「関家蔵品入札競売目録」）。

昭和11年5月12日、加茂川の大橋畔で行われた「明治天皇布晒天覧聖蹟碑」の除幕式に主唱者として夫婦で招かれ、2年後の昭和13年5月17日に77歳で

亡くなっている。加茂織物工業組合の監事であった。

2 土田麦僊の書簡

関真次郎に宛てた美術関係者からの書簡類は、土田麦僊が、手紙53通、葉書14通。安田靫彦が、42通、京都相国寺の橋本独山禅師からが40通残っているという。このうち麦僊の書簡67通は、現在、新潟県立美術館、万代島美術館の所蔵である。麦僊と真次郎は、明治44年11月16日から麦僊の死の前年昭和10年まで、24年間にわたって文通を続けた。

最初の手紙は、麦僊が24歳で京都専門学校（現京都芸術大学）別科を卒業したところで、師の竹内栖鳳の家から出されている。「未熟なる小生等に御清嘱の義、誠に恐縮に存じ候」と真次郎が学校を卒業したばかりの若手の画家に作品を注文したことがわかる。商用で京都へいくことの多かった真次郎が、竹内栖鳳を通して「新潟県出身の有望な画家」として紹介されたことも考えられる。ちなみに、この絵の代金は35円であった。

昭和十三年「麦僊遺作集」掲載
土田麦僊



このころ、同門で後に文化勲章を受章した小野竹喬を紹介し、「価格の義は、寸法は非常に小さいものですが、非常に苦心したものですから20円位は御送り願ひたひと思います」と同僚の作品まで売りつけている。「市内三条東洞院下ル東側、長谷川様方関真次郎様」など京都市内宛が4通が残る。

また、冬期間は避寒に熱海温泉へも行っていたとみえ、3通が「伊豆国熱海 新玉屋 関真次郎様」となっている。大正期は新玉屋が定宿だったらしく安田靫彦も同じ旅館へ出したのが2通ある。

麦僊の代表作となる「大原女」製作について、モデル代等の費用に困って30円の借用を申しでている。文面は「何卒金参拾円拝借願ひ度、誠に申し兼ね候ひしも、此度の出品大原女なる為、日々のモデル費に閉口致し候、近々御上京遊ばされ候哉。小生も来月十日頃再び大原へ出掛ける考へに御座候、先は右御願ひ迄、早々頓首」である。真次郎が京都へくるのを首を長くして待っている様子が良くわかる手紙である。

「大原女」は、大正4年10月に開かれた第9回文部省主催の美術展（文展）に出品して、3等賞を受賞した。この年5月から京都府大原村に滞在して「大原女」を描いた。金地六曲一双の屏風絵で、風景と人物を融合し、桃山障壁画を彷彿させる装飾を追求した作品として高い評価を受けている。

真次郎は麦僊の絵を加茂の主要な人々に紹介したようで、市川、石田、皆川、服部又七など、加茂町の資産家の名前がでてくる。なかでも石田友蔵（紺友様）が大正7年に良寛の書を麦僊に送ったのが注目される。

麦僊は大正10年から12年までヨーロッパへ取材旅行にいき、ヨーロッパ各地の美術館や名所を巡っている。この旅費についても真次郎は援助を惜しまなかったようで、出発直前に餞別の礼状をだすとともに、ヨーロッパ各地から10通の絵葉書を出している。この絵はがきは、昨年、長岡の県立美術館で開かれた特別展に展示された。

3 安田靫彦の書簡

安田靫彦の真次郎宛の手紙は41通残っている。最も古いとされるのは、2月7日付けで「良寛上人伝、此の度御恵贈を辱ふし御芳情の程、御厚礼申上候。過日拝見の上人の御筆は、実に忘れ難きものにこれあり候」という文面である。靫彦が自身の思い出を綴った『書を思ふ』で、「大正元年の春だったとおもふ。越後の加茂の関といふ老人が来られた時、隅々、長歌を書いた一巻を見せて貰って、万葉仮名のほのぼのとした高古とも言へる美しさに打たれた。それが良寛の書であった」と記されていることから、大正元年と推定されている。

大正元年、真次郎は51歳、老人というのは少々気の毒な気がするが、真次郎との長い親交の中で、靫彦にとっては「ご老台」なのであろう。いずれにせよ、先の麦僊とほぼ同じ時期に文通が始まったと考えられる。良寛の書に出合った靫彦は、以後良寛への興味を深めていく。

大正8年の手紙に「八年以前、尊台により給はれ候良寛和尚との機縁は小生にとり多幸此上もなく、この御恩恵は永く忘却すべからざるものに御座候」とある。

最後に安田靫彦の手紙の中で、自身と真次郎の絵が書いてある手紙を紹介する。「寸暇庵老、青牛生清談の図」と書いてある。寸暇庵

は真次郎で青牛生は靫彦の別号。真次郎は晩年、耳が遠くなっていたようで、長いラッパ状のものを耳にあてて話している図がユーモラスで、いかにも心温まる絵である。



土田 麦僊「大原女」

現在、東京・山種美術館 所蔵



関真次郎と安田靫彦の清談の図

加藤僊一著
『安田靫彦の書簡』より

平成21年度の歩み

1 入館者数（平成21年4月～平成22年3月）

区 分	市 内	市 外	計	団 体
大 人	260	424	684	5
小中学生	270	47	317	0
計	530	471	1,001	5

2 資料収集の状況

本年度は、8名の方々から計19件163点の資料をご恵贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

〈寄贈品名〉

盤・ドリル・ヤスリ・鉋類・鋸類・バリカン
 ・藁沓・日章旗・荷縄・蓑・深靴・ばんどり・
 わらじ・除草機・ぼっこ・綿繰機・屋根ふき・
 すた・馬鋏(回転式、手振式)・田掻車(ハッタン)・
 すき・軍隊用乗馬用脚絆・根入れ用大壺・
 紙煮釜・質桁

〈寄贈者ご芳名〉

小 柳 菊 治 様 阿 部 房 様
 佐 藤 久 雄 様 中 山 勇 様
 坂 上 幸 彦 様 有 本 増 三 様
 茂 岡 明与司 様

3 レファレンス・サービス(問い合わせ30件)

- ◆ 4年生の児童を加茂川源流へ連れて行きたいが、道はあるか。また、どんな様子か。
- ◆ 青海神社の古い時代の建物の配置について。
- ◆ 加茂の考古の資料がほしい。
- ◆ 加茂市内の城跡の地図はないか。
- ◆ 桐箆筒取材をさせてほしい。
- ◆ 全国を回っているが、加茂の山城、文化財の位置が知りたい。
- ◆ 上条城と下条城の位置が知りたい。
- ◆ 須田地区の遺跡があるか。
- ◆ 永井慈現の資料が欲しい。
- ◆ 加茂市史(旧版)の下巻がほしい。
- ◆ 加茂地内にあるNTTドコモの数箇所の鉄塔について、埋蔵文化財包蔵地であるかどうかの調査が、過去になされたかどうか。

4 博物館実習生受入れ

期 間 9月7日～9月15日

人 数 2名

新潟大学・教育人間科学部 学生 1名

人文学部 学生 1名

5 古文書講座

【第1回】平成21年9月1日

時 間 午後7時～8時40分(毎回)

会 場 加茂市公民館第1研修室(毎回)

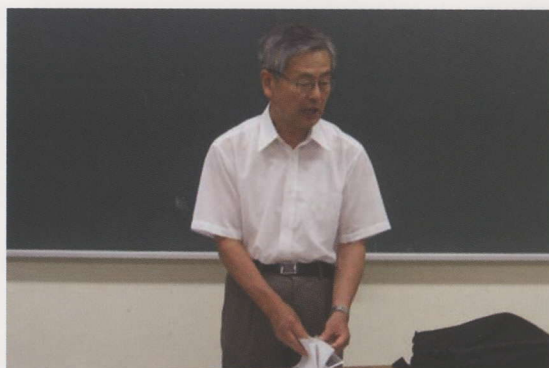
講 師 加茂市文化財調査審議会

委員長 溝口 敏磨 先生

受講者 51名

テーマ 「青海神社と新発田藩の関わり」

明治期の資料から、青海神社と新発田藩の関係を解き明かす。



溝口 敏磨 先生

【第2回】平成21年9月8日

講 師 加茂市文化財審議会

委員 関 正平 先生

受講者 36名

テーマ 「俳諧書『既望笠』を読む」

加茂市小橋出身の菊文(村越七右衛門)が、旅先の地や各地の俳諧者から寄せられた句をまとめた俳諧書「既望笠」を基に解説を加える。

【第3回】平成21年9月15日

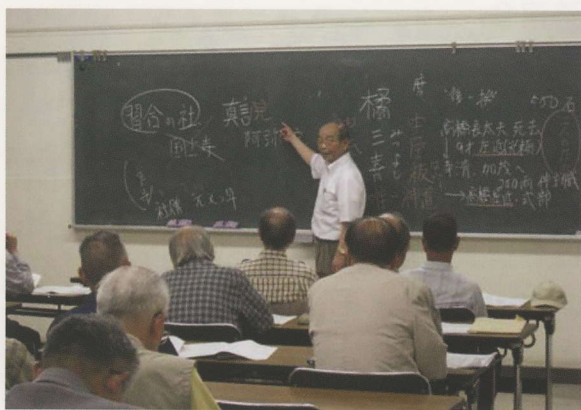
講 師 加茂市文化財審議会

委員 佐藤 賢次 先生

受講者 42名

テーマ 「青海神社高橋神主の神仏分離の試み」

江戸時代の青海神社について、神仏習合の社から仏教色を排斥し、吉田神道に傾倒する過程を、古川神主が新発田藩に訴えた文書から読み取る。



佐藤 賢次 先生

【第4回】平成21年9月24日

講師 加茂市文化財審議会

副委員長 長谷川 昭一 先生

受講者 34名

テーマ 「明治初期種痘の関連文書を読む」

明治9年大谷村の種痘児取調御届や
明治11年の種痘謝礼送書、明治28年
事務報告などを読み、当時の種痘児の
年齢や代金などを読み取る。

【第5回】平成21年9月29日

講師 加茂市文化財審議会

委員 丸山 朝雄 先生

受講者 41名

テーマ 「北潟の新田開発」

現在の北潟村の元和～延宝年間の開
作免状や開発請状を解説し、新田開発
の状況を紐解く。

6 歴史講演会

日時 平成21年11月14日（土）

会場 加茂市公民館 第1研修室

受講者 43名

講師 加茂市文化財審議会

委員 丸山 朝雄 先生

演題 「精神病施療の先駆者

永井慈現^{じげん}について」

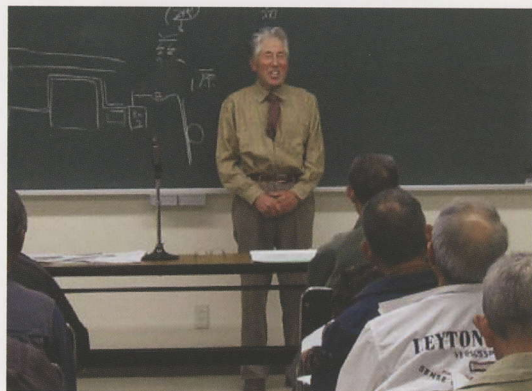
<内 容>

① 享保の時代から9代にわたり9人の慈現
(同一名)が、この地で200年にわたって
精神病者の施療にあたってきたことは驚くべ
きことである。

② 慈現家の成り立ちを、順行寺の系譜から解
き明かす。永井順行寺の元祖は宗祐^{しゅんぎやうじ}といい、

慈現の親は三代目の宗智である。慈現は、父
の宗智より、「医業を以って生業とせよ」と
諭され独立し、寺に伝わる秘薬（神腦丸）を
源に、精神病者の施療をしたと思われる。

③ フランスにおけるピネルの顕彰は世界周知
の事柄であるが、ピネルの精神病者の開放と
いう劇的な業績より1世紀近く前の時代か
ら精神病に取り組んだ日本の漢方医こそ、世
界中から賞賛されてしかるべきであろう。



丸山 朝雄 先生

7 特別歴史講演会

日時 平成22年3月20日

会場 加茂文化会館 小ホール

受講者 170名

講師 立教大学名誉教授

藤木 久志 先生

演題 「戦国を生きた人々」



立教大学名誉教授
藤木 久志 先生

藤木先生は旧東蒲原郡上川村でご幼少を過ごされ、英語教師で
あったお父様の勤務の関係で、須田中学校、加茂高校に学ばれた。
講演会前日の3月19日には、縁の深い須田の地で、小学6年生
と保護者、教職員を前に、上杉謙信について熱く語られた。

<内 容>

① 戦国時代は大名だけが武器を持っていたわけ
ではなく、農民も弓や槍で戦う能力を持ってい
た。敵軍の兵糧^{ひやうろう}部隊を襲うこともあった。

🍷 戦国の戦争は、食うための戦争、生き延びるための戦争であった。上杉謙信は、農閑期に兵を出した。関東の実りを求めて出兵したり、大阪^{ろうじょう}城^{ろうへい}では、農民が傭兵のような形で参加したりした。

🍷 戦争が稼ぎ場になることもあった。食料、物品、牛馬、人間といわず、「乱取り」をしたり、さらわれた親戚・縁者を買い戻したりする習慣もあった。また、人身の売買も日常のように行われ、後の秀吉による「人身売買禁止令」につながった。

🍷 戦火や略奪から身を守る避難所の役割を果たしたのが各地の城や神社であった。天守閣のある城ではなく、山の上に築かれた山城や麓の館などである。加茂の場合は、青海神社の背後に要害山城^{けんみね}、剣が峰城^{おふるやま}、尾振山城が連なっている。城や神社は、加茂の住民の避難場所であった可能性がある。

平成22年度の事業予定

資料の収集・調査・展示 随時

レファレンスサービス 随時

古文書講座

第1回 8月30日(月) 関 正平 先生

第2回 9月 7日(火) 溝口 敏麿 先生

第3回 9月14日(火) 佐藤 賢次 先生

第4回 9月21日(火) 長谷川昭一 先生

第5回 9月28日(火) 丸山 朝雄 先生

会場 加茂市公民館

時間 午後7時～8時40分

歴史講演会

11月に開催の予定(日時は未定)

会場 加茂市公民館 第1研修室

講師 加茂市文化財調査審議会委員

関 正平 先生

特別歴史講演会

平成23年3月19日(土)

会場 加茂文化会館小ホール

講師 加茂市文化財調査審議会委員

山崎 完一 先生

<新規事業>

加茂市の遺跡に触れる会(仮称)

開催日時・会場は要望に応じて随時実施

昔の加茂を映像でふり返る会(仮称)

開催日時・会場は未定

※ 加茂市民俗資料館では、平成22年度、新たにこれら二つの事業の実施に取り組んでまいります。

【編集後記】

◆ 新館長のあいさつ文にもありますように、民俗資料館も幾多の変遷をたどりながら現在に至っています。社会の変化も急激に進み、ややもすると足元を見失いそうにもなります。そんな時、私たちの祖先が英知を結集して創造してきた文化財を、もう一度立ち止まって見つめ直すことも意義のあることと思います。新規事業にも順次取り組んでいきますので、多数の方々のご利用をお待ちしております。

◆ ご多忙の中、玉稿をお寄せいただいた長谷川昭一氏に深く感謝申し上げます。

加茂市民俗資料館

■開館時間 9:00～17:00

■休館日 月曜日、毎月第1,3,5土曜日

祝日、年末年始

※ 但し、4,5月は月曜日のみ(祝日に当たるときは次の平日)

■入館料 無料

■展示内容 市指定文化財を含む、考古・民俗・歴史資料
約1200点

■加茂駅から徒歩8分

お車でお越しの方は、加茂山公園駐車場をご利用ください

〒959-1372 新潟県加茂市大字加茂229番地1

TEL / FAX: 0256-52-0089

E-mail: minzoku@city.kamo.niigata.jp

